

教育相談

不登校児童生徒への適応指導プログラムに関する研究

教育相談課 指導主事 野々口 浩 幸 他2名<注>

要 旨

こころの教育相談センターに通う不登校児童生徒に対して、自然体験や社会体験など、自己肯定感と自己存在感を高め、集団への適応力を培う活動を通じた適応指導に関するモデルプログラムの開発を行った。開発に当たっては「各体験活動の関連を考えた段階的なプログラムの設定の仕方」「計画段階や実施段階における児童生徒の自己決定の場の設定の仕方」「継続的適応指導と体験的適応指導の有機的な連携」について配慮した。

キーワード：不登校 適応指導 自然体験 社会体験

I 主題設定の理由

文部科学省の学校基本調査によると、平成19年度に年間30日以上欠席した国公立の小・中学校における不登校児童生徒は129,254人〔前年度合計126,894人〕（小学校23,926人〔前年度23,825人〕、中学校105,328人〔前年度103,069人〕）であり、平成18年度から2年連続の増加となった。こころの教育相談センター（以下「当適応指導教室」とする）においては平成20年度1月末現在で、22名の不登校児童生徒が通所し、適応指導を受けている。

現在、当適応指導教室に通所してきている児童生徒には、自己肯定感が低く活動エネルギーに乏しかったり、心理的に不安定で気持ちの浮き沈みが大きかったり、人間関係づくり（特に三者以上の関係づくり）がうまくできなかつたりする面が多く見られる。このような面を改善し、自然体験や社会体験など、自己肯定感と自己存在感を高め、集団への適応力を培う活動を通じた適応指導に関するモデルプログラムを開発し、体験的適応指導教室の内容と援助の在り方を実践的に明らかにするため本主題を設定した。

II 研究の目標

自然体験や社会体験など、自己肯定感と自己存在感を高め、集団への適応力を培う活動を通じた適応指導に関するモデルプログラムを開発し、体験的適応指導の内容と援助の在り方を実践的に明らかにする。

III 研究の実際

1 平成19年度実践の概要と結果

(1) 調査研究のために実施したプログラムの重点項目と主な配慮事項

当適応指導教室では、通所する児童生徒が文部科学省の分類である「複合型」と「不安など情緒的混乱の型」の不登校であったため、両方の型の児童生徒に対応した体験的適応指導のプログラムの在り方を念頭において調査研究を進めてきた。

	段階的プログラム設定	自己決定の場の設定	有機的な連携
宿泊体験	・体験活動参加への不安の軽減 ・リラクゼーション体験 リラクゼーション体験により対人不安等の軽減を図る。 ・自己肯定感の高揚 陶芸活動を通して、成就感を味わわせ、自己肯定感を高める。	・宿泊体験への参加 ・リラクゼーション体験への参加 ・陶芸活動への参加 ・食事献立、買物計画の決定	・フリータイムを活用した準備活動 ・振り返り感想記入 ・三者以上の関係づくり

ふれあいサマーキャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・対人関係の改善 日常とは異なる生活環境における集団生活を通して、対人関係の改善を図る。 ・自己肯定感の高揚 体験活動等を通して成就感を味わわせ、自己肯定感を高める。 ・テントを利用した野外宿泊 ・野外調理，会食 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループメンバー及びグループ名の決定 ・Tシャツ図柄の決定 ・キャンプファイヤーのスタンプの決定 ・食事献立，買物計画の決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・フリータイムを活用した準備活動 ・振り返り感想記入 ・全体交流の促し
職場・ボランティア体験	<ul style="list-style-type: none"> ・自己存在感の高揚 希望する職種での企業体験及び園児とのふれあいの中で、自分自身の価値に気付かせ、自己存在感を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問先の選択と参加決定 	<ul style="list-style-type: none"> ・フリータイムを活用した準備活動 ・振り返り感想記入

(2) 体験活動の概要

(ア) 宿泊体験（5月24日～25日）

① 概要

- ・目的 通所生及びスタッフとの共同宿泊体験を実施し、今後の活動への参加意欲を高めサマーキャンプへの不安を軽減する。
- ・内容 実施場所：五所川原市（宿泊場所：中の島ブリッジパーク）
[1日目] リラクゼーション体験（し〜うらんど海遊館）
[2日目] 陶芸活動（津軽金山焼窯場）

② 配慮事項

- ・グループ分けについては、通所生の対人関係の在り方に配慮して決定した。
- ・一つのグループにスタッフが1～2名つくことで、通所生の安全確保に努めるとともに、良好な人間関係づくりを援助するようにした。
- ・対人不安を軽減するためにリラクゼーション体験を実施した。
- ・7月のサマーキャンプでの野外宿営の不安解消をねらい、サマーキャンプと同施設で宿泊体験を実施した。
- ・プログラムを減らし、人間関係づくりのきっかけが生まれるように配慮した。

③ 通所生の様子

- ・男子2名，女子5名の計7名が参加した。
- ・実施前は、宿泊への不安を訴える通所生が多かった。しかし、宿泊体験の活動内容を理解し、指導員や参加する通所生との関係ができてくるにつれ、不安は軽減されていった。
- ・「し〜うらんど海遊館」では、リラクゼーションプログラムの体験により、口数の少ない通所生も声を出して笑ったり会話に参加したりするなどしていた。また、水着の着用をためらっていた通所生が、他の通所生からの働きかけで参加を決意する姿が見られた。
- ・夕食準備においては米磨ぎ，食事作りを通して協力する姿や不得意な活動に挑戦する姿が見られた。
- ・「津軽金山焼窯場」における陶芸活動では，どの通所生も黙々と作品作りに打ち込む姿が見られた。
- ・全体的に心配したほどの問題はなく，サマーキャンプに向けての心構えはできたと思われる。

(イ) ふれあいサマーキャンプ（7月4日～6日）

① 概要

- ・目的 豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中での集団生活や体験的活動を通して，参加している通所生や指導員とのふれあいを深め，それによって自立心をはぐくみ，集団への適応能力や生活意欲を高めるとともに，成就感を味わわせ，自己肯定感の高揚を図る。
- ・内容 実施場所：五所川原市（宿泊場所：中の島ブリッジパーク）
[1日目] カヌー体験（大沼），夜の集い
[2日目] 靄山（もややま）登山，釣り体験（小泊漁港），室内ゲーム（夕方から雨天のため）

② 配慮事項

- ・班ごとのオリジナルTシャツを作ることによって、班員同士の一体感が得られるように配慮した。
- ・2週間前からTシャツ作り、しおり作りを始め、「自分たちで作り上げる意識」が高まるように配慮した。
- ・「班編成」「献立」「Tシャツの図案」について、話し合いの場を設定し、スタッフも話し合いに加わりながら通所生が自分たちで決められるように援助した。
- ・通所生が「活動プログラム」の作成に関与できるようにすることで、活動に見通しをもたせ、活動する意欲が育つように配慮した。
- ・サマーキャンプに必要な準備物を通所生に検討させ、自分たちが中心となり準備できるように配慮した。
- ・期間中2名の指導補助員をお願いしたり、登山活動等に外部講師をお願いしたり、普段、接触することが少ない外部の人との接触の場を意図的に設けた。

③ 通所生の様子

- ・男子3名、女子7名の計10名が参加した。
- ・宿泊体験での経験があったため、宿泊に対する不安を訴える声はなかった。
- ・前回の宿泊体験で施設の様子や使い方を理解していたため、食事の準備や後片付けなど意欲的に素早く進められていた。
- ・テント設営、火おこしといった活動では、その必要感からかお互いに声をかけて協力する姿が見られた。
- ・登山活動では、急斜面に苦しみながらも、頂上にたどりつくことができた。また、くじけそうになった仲間に頂上から大きな声でエールを送る光景が見られた。活動後は、互いの努力をたたえ合うなどし、集団としての一体感が形成されていた。
- ・通所生は、現地で出会う初対面の人とも積極的に接触することができた。
- ・雨天のため急きょ、キャンドルサービスに変更したが、通所生は準備や進行を落ち着いて進めていた。スタンプやゲームに積極的に参加する姿が見られ、楽しく活動していた。

(ウ) 第1回職場・ボランティア体験（9月27日）

① 概要

- ・目的 職場を訪問し、職業の特質や仕事の内容を知るとともに、働くことの喜びや社会の一員としての立場を理解させる。さらに今後の生活における自己の生き方を考えさせ、生活意欲を高める。
- ・内容 レンタルショップ、映画館での活動

② 配慮事項

- ・事前調査をもとに、通所生と話し合いながら活動場所等を決定するように配慮した。
- ・当日は、各活動場所にスタッフを4名ずつ配置し、通所生がスムーズに活動できるように配慮するとともに、通所生の状態の把握や安全確保に努めた。

③ 通所生の様子

- ・男子2名、女子6名の計8名が参加した。
- ・希望したレンタルショップと映画館での活動であったが、普段は入れない場所で活動することや、働く人の苦勞を知ることができた。

(エ) 第2回職場・ボランティア体験（11月8日）

① 概要

- ・目的 第1回職場・ボランティア体験と同じ
- ・内容 レンタルショップ、ケーキ店、保育園での活動

② 配慮事項

- ・第1回ボランティア活動の経験をもとに、活動場所を児童生徒に選択させるようにした。また、今回は小さな子どもたちとのふれあいを体験させるということで意図的に保育園を設定した。
- ・当日は、各活動場所にスタッフを3人ずつ配置し、通所生がスムーズに活動できるように配慮するとともに、通所生の状態の把握や安全確保に努めた。

③ 通所生の様子

- ・男子2名、女子7名の計9名が参加した。

- ・保育園での活動に3名が参加した。普段はおとなしい子たちであるが、体験終了後は「すごく良かった。子どもたちがかわいかった」と感想を述べ、大変満足したようだ。
- ・ケーキ店では緊張感のある職場で「失敗してはいけない物だから、プレッシャーを感じた」と言っていたが、ケーキのデコレーションを体験させてもらい、充実した体験になった。

(ウ) 第3回職場・ボランティア体験 (11月29日)

① 概要

- ・目的 青森県動物愛護センターを訪問し、動物にかかわる愛護センターの役割や仕事の内容を知るとともに、動物を愛護することの大切さを実感させる。さらに犬や猫などの動物を介在し、さらに人とのつながりのよさを体験させる。
- ・内容 犬のシャンプーおよびしつけ訓練、馬の世話および乗馬体験、その他

② 配慮事項

- ・最初に動物愛護センターの役割を職員の方に説明していただき、人間と動物のかかわりの大切さを学んだ。
- ・当日は、3班に分けて全員が犬のシャンプーおよびしつけ訓練、馬の世話および乗馬体験、散歩時間などを設定して、すべてのプログラムを全員が体験できるようにした。

③ 通所生の様子

- ・男子3名、女子10名の計13名が参加した。
- ・通所生は皆、とてもよい表情をしていた。動物たちからエネルギーと安らぎをもらい温かい気持ちになったと思われる。
- ・「動物はいいな。人間はコミュニケーションが面倒だ」と話していたのが印象的だった。

(3) 実践研究による通所生の変容

通所生に対する体験プログラムの効果を測定するために、平成19年度はAN-エゴグラムと自己肯定度インベントリーを使用して、集団変容と個人変容について分析した。

① 集団としての変容(図1, 図2)

「宿泊体験」「ふれあいサマーキャンプ」および「職場・ボランティア体験(第1回～3回)」のすべてに参加した7名の生徒を抽出し、それぞれの行事が終了後、AN-エゴグラムを実施した。

「ふれあいサマーキャンプ」直後に実施した7月の結果をみると、5月に比べてCP(支配的親の自我状態)、NP(養育的親の自我状態)、A(冷静な大人の自我状態)、AC(順応した子どもの自我状態)が上昇し、なかでもCPとNPはt検定で5%水準での有意差があった。一方、FC(自由な子どもの自我状態)は若干、低下した。12月までの全体的な結果からみると、7月の「ふれあいサマーキャンプ」の体験が心的エネルギーを高めたが、それ以降は大きな変容は見られなかった。

自己肯定度インベントリーにおける集団全体の変容については、検定の結果、統計的に有意差は認められなかった。5月より「宿泊体験」「ふれあいサマーキャンプ」終了後の10月にかけて、「一般的自己」に対する肯定感が上昇したことは、プログラムの効果と考えられる。10月から12月にかけては、「仲間場面での自己」は上昇が見られたものの全体的に肯定感が下降した。これはプログラム前後の通所生に応じた取り組みが十分でなかったからと考えられる。具体的には、中学3年生が多い中で、進路や学習への不安など児童生徒一人一人の状態をつかんだ対応が十分でなかったことなどが推察される。

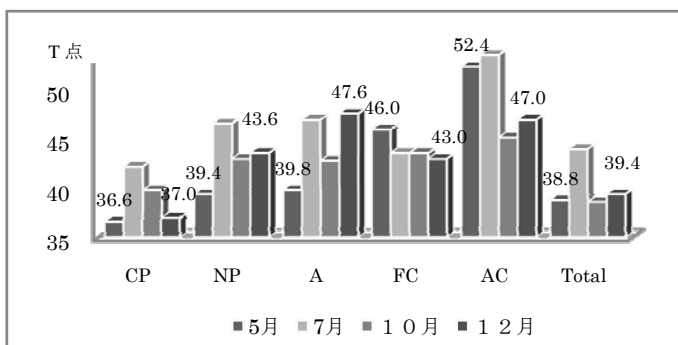


図1 集団のAN-エゴグラムの変容

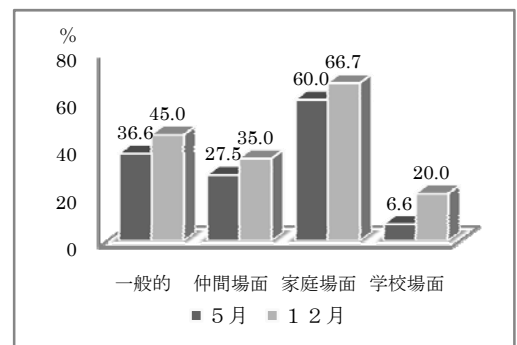


図2 集団の自己肯定度インベントリーの変容

② 「不安など情緒的混乱の型」に分類されるA子の変容(図3, 図4)

小学校のときから不登校であったA子は、中学校入学後も不登校となった。そこで母親に伴われて1年生の2学期に当センターに相談のため来所し、その後3学期から適応指導教室で活動した。2年生の5月と12月のAN-エゴグラムではNPとAが上昇しているが、大きく変容しているのはACの低下である。適応指導教室内で、同じようなおとなしいタイプの生徒との二者関係を築き、自分の居場所をつくって休むことなく毎日通所した。控えめで自己主張することが苦手だったA子の不安は、指導員や通所生とのかかわりの中で少しずつ解消していったものと思われる。2年生になると担任の先生の継続的な努力もあり、学校行事にも徐々に参加できるようになっていった。

自己肯定度インベントリーでは「一般的自己」「仲間場面での自己」「家庭場面での自己」が高まりを見せた。ただし、「学校場面での自己」に関しては、5月も12月時点でも無得点となった。それでも高校進学に意欲を持つようになると、学校での勉強を重視し、3年生進級と同時に学校に完全再登校するまでになった。そこには、担任をはじめとする学校側のA子に対する丁寧なかかわりを継続してきたことが背景にあると思われる。

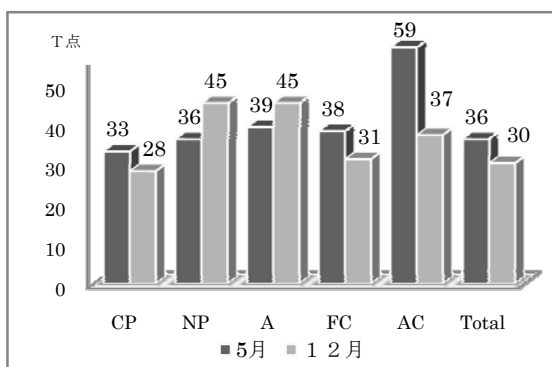


図3 A子のAN-エゴグラムの変容

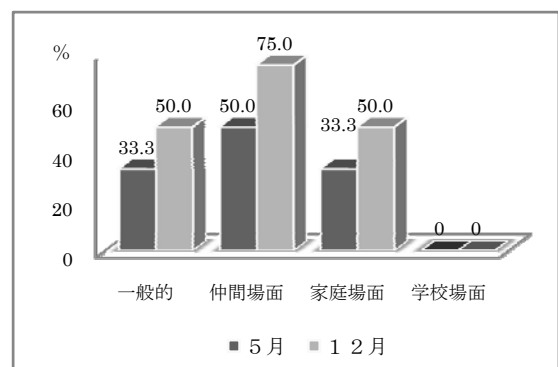


図4 A子の自己肯定度インベントリーの変容

2 平成20年度研究実践の概要と結果

(1) 調査研究のために実施したプログラム全般について

体験活動については平成19年度のプログラムを基本とした。変更したのは「ボランティア体験」を青森県動物愛護センターにおいて8回実施し、「職場体験」を1回目は希望職種で、2回目は保育園・幼稚園で実施した点である。また、今年度の重点項目を次のように掲げた。

- | | |
|--------|---|
| ◆ 生活指導 | ・学習時間を明確に区切ることで学習に対する意識化
・毎日の学習計画立案と振り返り（「ふれ愛カード」の記入）の徹底 |
| ◆ 学習支援 | ・楽しく、よくわかり、点数のとれる授業の実施（数学・英語） |
| ◆ 体験活動 | ・調理実習の計画的実施
・午後の体験活動（「フリータイム」）における対人交流の活性化 |
| ◆ その他 | ・担当相談員（指導主事）が記録簿・振り返り用紙を見る工夫
・指導員の研修（他の適応指導教室の見学） |

上記の項目に関して、すべての項目が十分にできたとは言えないまでも、それぞれ通所生にかかわる指導員・相談員が常に意識を持って活動してきた。午前中の「学びタイム」における学習の定着、指導員による基礎的な数学と英語の授業、調理実習を通しての対人交流の活性化など、日常の指導・支援の効果が少なからず徐々に現れてきたと思われる。

(2) 体験活動の概要

「宿泊体験」「ふれあいサマーキャンプ」についての目的、配慮事項および実施場所については平成19年度と同様とした。

(ア) 宿泊体験（5月22日～23日 前年度と同じ体験プログラムで実施）

通所生の様子

- ・男子3名、女子5名の計8名が参加した。

- ・「し〜うらんど海遊館」では、男子は全員プールに入ることができたが、体調などを理由として入れない女子が数名いた。
 - ・炊飯準備においては、どの通所生も割り当てられた作業をしっかりとこなし、早々と活動を終わらせていた。また、自分の作業が終わっても他者を助ける場面が見られた。
 - ・「津軽金山焼窯場」における陶芸活動では、楽しくかつ真剣に作品づくりに打ち込んでいた。
- (イ) ふれあいサマーキャンプ（7月2日～4日 前年度のプログラムにしじみ採取・ダム見学を加えた）

通所生の様子

- ・男子3名、女子5名の計8名が参加した。
 - ・釣り体験は最後まで飽きることなく活動し、釣ったときのうれしそうな表情は印象的だった。また釣った魚は指導員と一緒に楽しそうに調理していた。
 - ・キャンプファイヤーでは各人がそれぞれの役割を果たすとともに、ゲームなどで笑顔を見ることができた。
 - ・個々人の役割を通して、様々な成長が見られたキャンプであった。
- (ウ) ボランティア体験（第1回～第8回 5月9日～10月31日）

① 概要

- ・目的 青森県動物愛護センターを訪問し、動物にかかわるセンターの役割や仕事の内容を知るとともに、動物を愛護することの大切さを実感させる。さらに犬や猫などの動物を介在し、人とのつながりのよさを体験させる。
- ・内容 動物とのふれあい、犬のシャンプー体験、馬の世話および乗馬体験、入館者の案内

② 配慮事項

- ・最初に動物愛護センターの役割を職員の方に説明していただき、人間と動物のかかわりの大切さにふれた。
- ・事前に通所生の動物アレルギーの有無について確認した。
- ・それぞれの通所生が活動している場所に、必ず指導員がつくように配慮した。

③ 通所生の様子

- ・動物とのふれあいによつての癒しから、センター内での仕事の補助、さらには入館者に対する案内などを順調にこなしていくことができた。
- ・特に動物が好きな通所生については、毎回、愛護センターに行くことがとても楽しみになっていたようである。

(エ) 職場体験（第1回 10月6日・第2回11月17日）

① 概要

- ・目的 職業の特質や仕事の内容を知るとともに、社会の一員としての責任感を育てる。さらに小さな子どもたちとのふれあいを通して、活動性を高める。
- ・内容 [1回目] 書店、ケーキ店、「道の駅」ゆ〜さ浅虫での活動
[2回目] 保育園、幼稚園での活動

② 配慮事項

- ・第1回ボランティア活動の経験をもとに、活動場所を通所生に選定させるようにした。また、今回は小さな子どもたちのふれあいを体験させたいということで意図的に保育園・幼稚園を設定した。
- ・当日は、各活動場所にスタッフを4～5名ずつ配置し、通所生の活動を支援するように配慮するとともに安全確保に努めた。

③ 通所生の様子

- ・1回目は男子3名、女子7名の計10名が、2回目は男子3名、女子13名の計16名が参加した。
- ・ケーキ店は緊張感のある職場で「自分が扱ったケーキが商品として売られるから、真剣に取り組んだ」と感想を述べていた。
- ・幼稚園、保育園での体験では、普段はおとなしい子たちであるが、体験終了後は「楽しかった。親の大変さがわかった」「先生たちの仕事の手伝いをして勉強になった」と感想を述べており、充実した体験となった。
- ・全般的に適応指導教室内では見せない、緊張した真剣な表情があり、外部での体験はとても貴重なものであった。

(3) 実践研究による通所生の変容

通所生に対する体験プログラムの効果を測定するために、平成20年度は従来のAN-エゴグラムと自己肯定度インベントリーに加えて、POMS（気分プロフィール検査）を取り入れ、集団変容と個人変容について分析した。

(ア) 集団としての変容（図5，図6，図7）

今年度から青森県動物愛護センターの協力を得て、5月から10月にかけて計8回の「ボランティア体験」を実施し、動物を介在しての活動を取り入れた。この活動は長野県動物愛護センターにおけるアニマルセラピーのプログラムを参考に実施し、その内容は三つのステージ（ステージⅠ：動物とのふれあい、ステージⅡ：自分の役割の遂行、ステージⅢ：社会参加）に分類して取り組んだものである。

長野での取り組みは、引きこもり状態にある不登校児童生徒を対象としたものであるが、動物を介在する活動によって「緊張感が減って、リラックスできるようになり、疲れやすさや思考力の低下などが減って元気がでてきたこと」、そして「自分を適切に表現でき、他人との温かい交流が行われやすい自我状態」（松澤淑美ら、2008）となったと報告している。しかし、当適応指導教室の児童生徒は、通所して社会的な参加がすでにできる状態にあるので、長野の対象児童生徒と心的な状態は異なっていることを考慮し、アニマルセラピーや他の体験プログラム後の変容について測定した。

測定対象となったのは、「宿泊体験」、「ふれあいサマーキャンプ」および「職場体験」のすべてに参加した8名とし、この児童生徒は昨年度からの通所生である。

まず4月と11月にAN-エゴグラム、5月初旬の「ボランティア体験」導入前と1回目、2回目の実施直後および10月の最後のボランティア活動終了後にAN-エゴグラムとPOMSを実施して比較検討した。

AN-エゴグラムでは、t検定の結果、CPが唯一5%水準で有意差が認められるほどに上昇し、NP、A、FCの上昇とACの低下には有意差は見られなかった。この上昇・下降傾向は長野県動物愛護センターとの結果と同様であるが、有意差が出るほどではなかった。

また、POMSの導入前と第1回の導入直後では「緊張・不安（A-H）」「抑うつ・落ち込み（D）」「怒り・敵意（A-H）」「活気（V）」「疲労（F）」「混乱（C）」の6下位尺度すべてが低下し、なかでも「緊張・不安」と「混乱」が1%水準での有意差があった。この低下傾向は第2回の体験まで若干の低下傾向が認められた。しかし、この後、「宿泊体験」や「サマーキャンプ」が実施されたため、測定してもこれらの要因が加わったので、3回から7回の実施後のデータはとらなかった。ただ、最後である8回目終了後にPOMSをとって比較したが、有意差が認められるほどの結果は得られなかった。

対象となっている通所生は、面接相談のための来所当初はAN-エゴグラム上では、全体的に心的エネルギーが過少傾向であり、FC < ACの周囲の目を気にして自己表現することが苦手であり、ストレスを溜めやすい傾向にあった児童生徒である。

それが昨年度来の体験活動や指導員とのかかわり、そして通所生同士のかかわりのなかで心的エネルギーの変容が図られた。それがさらに今年度からの動物愛護センターでの第1回の体験活動で動物とかかわることによって心が癒されるとともに、後半では入館者である幼稚園児や小学生、さらには老人保健施設で暮らす高齢者に対する援助を行うなど、積極的に働きかけることができるようになっていった。

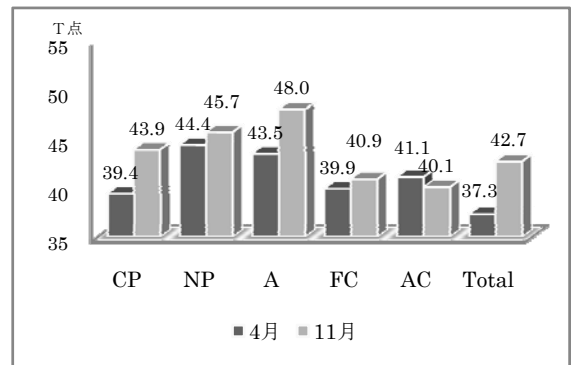


図5 集団のAN-エゴグラムの変容

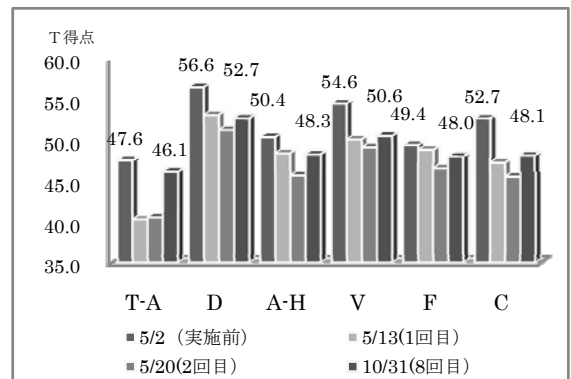


図6 集団のPOMSの変容

2学期には、全体に対して徐々に登校指針を与え、学校行事への参加、または定期考査への受験を促した結果、ほぼ全員が学校での考査受験を果たした。また、その他に登校回数を増やしている通所生もいる。この効果は、自己肯定度インベントリーにおける「学校場面での自己」が28.7→52.3と増加していることに反映されているものと思われる。また、適応指導室内での人間関係の広がり「仲間場面での自己」を28.5→39.8へと増加させている。また、今年度は「職場体験」の1回目は希望職種とし、2回目は幼稚園か保育園を選択させ、意図的に小さな子どもたちとのかかわりを持たせた。これは、「ボランティア体験」での動物から人とのかかわりへと移行させ、特に小さな子どもたちとのかかわりよってのFCの活性化を図ったものである。「一緒に遊んでいると、私が小さい頃を思い出して、私がタイムスリップしたみたいな感じでした。これでますます子どもが好きになりました」と、「帰りに『明日も来る?』『明日も来てよ!』と言われたり、自分が作ったものをくれたり、明日も来たいな…と思いました」と感想を述べるなど、一定の効果があつたものと思われる。

通所生が部分的に再登校をし出すと、緊張や不安が再び上昇する傾向にあるが、しかし適応指導教室内の他のみんなが登校しているという雰囲気になってくると、大きな力になるようである。時折、制服姿で通所することもあり、自らの原籍校を意識するようになってきている。

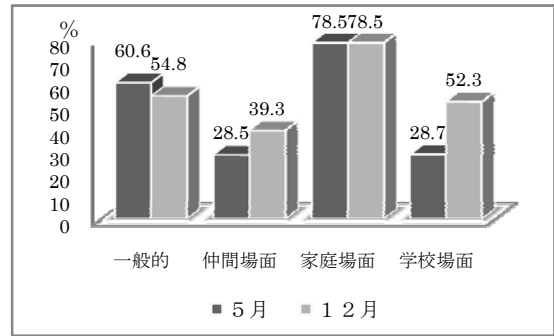


図7 集団の自己肯定度インベントリーの変容

(イ) 「不安など情緒的混乱の型」に分類されるB子の変容 (図8, 図9, 図10)

B子は昨年度後半から適応指導教室へ通所した中学校3年生の生徒である。初回面談時のAN-エゴグラムでは、心的エネルギーの総和は34であり、NP優位のN型であった。この結果から、対人関係における自己抑圧とストレスの蓄積、心的エネルギーの低調を読み取ることができた。約1年間引きこもり状態にあり、2年生になって学級担任が替わってもB子はその新しい担任と会うことができず、学校と家庭とは音信不通の状態が続いていた。2年生の秋に母親に連れられて相談のため来所し、会ってみると自信のない寡黙な子どもという印象であった。

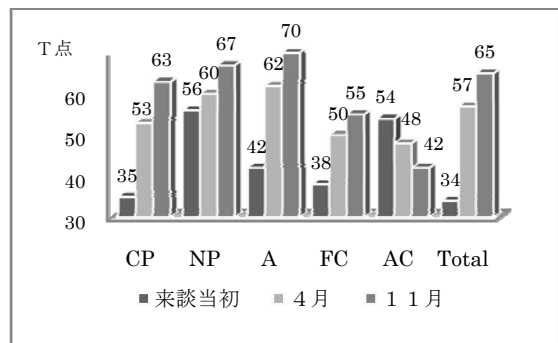


図8 B子のAN-エゴグラムの変容

コミュニケーションも母親が代弁することが多く、ずっとうつむいたまま時間を過ごすことが多かった。指導員は内向的なB子のありのままを受けとめ、B子のペースでコミュニケーションをとったり、好きなスポーツと一緒にする機会を多く持ったりするように心がけた。

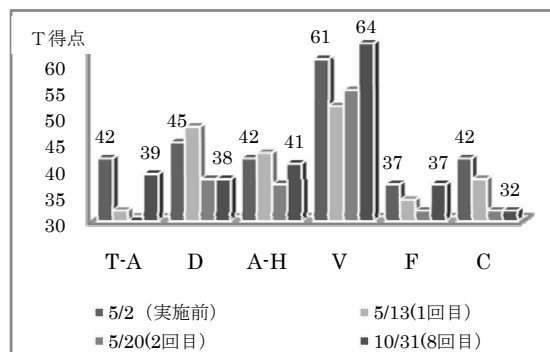


図9 B子のPOMSの変容

そのB子が大きく変わったのは昨年2月に実施された「ウインターキャンプ」からであると思われる。自然な笑顔や自主的に活動へ参加する様子がうかがわれ、適応指導教室でも少しずつ人間関係の幅ができてきていた。今年度4月には初日から元気よく自転車で通所しており、ここでの活動や体験が大きく影響を与えていた。4月はCP, NP, A, FCが上昇し、ACが低下している。さらに11月時点でも、さらにその傾向は強まっている。また、POMSでも「活気(V)」が高得点であり、また他の下位尺度は低く安定しているので情緒的落ち着きを推測することができる。さらに「自己肯定度インベントリー」では、学校に定期考査を受けに行ったり、自主的に体育祭や文化祭の

見学あるいは学級の友達と会ったりすることができたことが0から100へと数値を大きく引き上げている。

ここでの活動では、周りに気配りしつつも行事などではリーダー的役割を果たせるようになり、通所する他の子どもたちも大きな信頼を寄せるまでの存在となっている。

B子は、「自分が変わらなければ」という意識を持っており、11月の面談時に不登校になったきっかけを「自分に負けたから」と話すことができた。その理由として「友達にも自分から話すことができない」「周囲の評価通りに行動しなければならないとプレッシャーをかけ続けてきた」「それを自分で変えたかったのにできなかった」と話してくれた。B子は自分で変わりたい、成長したいという意欲を持って通所していたことと、学校側と連絡を取って担任と会えたこと、そこにスクールカウンセラーが入ってくれたことが安心感につながっていった。

適応指導教室での活動や体験がB子の成長に大きな役割を果たしているが、そこには指導員の方々の見えない努力がある。さらに担任のB子に対する思いが伝わっていったことなど、組織的・機能的な支えがあってB子の心的成長が見られたと思われる。現在、学級の友達と卒業式へ一緒に参加できることを目標に部分登校するなど努力を続けている。

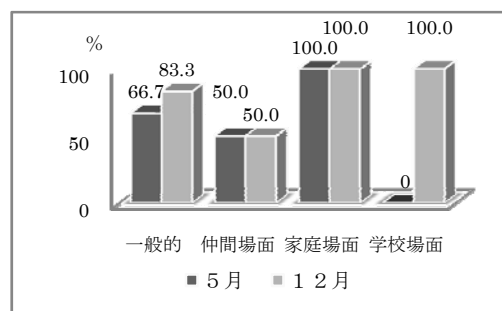


図10 B子の自己肯定度インベントリーの変容

III 研究の成果

「各体験活動の関連を考えた段階的なプログラムの設定」「計画段階や実施段階における児童生徒の自己決定の場の設定」「継続的適応指導と体験的適応指導の有機的な連携」を心掛けて作成したプログラムは、通所生の心理検査の結果からみると、自己肯定感の向上、全体的活動エネルギーの向上に効果がみられた。ただし集団における効果に関しては、統計的処理による有意差を若干、見いだせる程度のものであった。

行動観察からは特に「ふれあいサマーキャンプ」をきっかけとして、自信を付けたり、学校とのかかわりが深まるなどの変容が指摘されている。平成19年度に体験活動プログラムへ参加した通所生7名全員が何らかの形で再登校することができ、また平成20年度についても動物を介在した「ボランティア体験」や1学期より参加した通所生6名全員が何らかの形で再登校することができた。また、プログラムの中で、不安の軽減のために、同一施設を繰り返し活用することや、リラクゼーション体験を位置付けたことは、通所生の参加不安を軽減することに効果があったと思われる。

これらのことより、各体験活動及びそれらを段階的に配置したプログラムは、不登校状態の改善に一定の効果があることを示唆しているものと思われる。

IV 本研究における課題

- (1) 適応指導教室での自然体験や社会体験の活動により、心的エネルギーの高まりと「不安・緊張」等のネガティブな感情の軽減が図られ、さらに学校との連携によって徐々に部分登校できる生徒も増えてきている。しかし、通所生の登校意欲に結び付けることは難しく、完全再登校に至る生徒は極めて少ない。心の問題だけでなく、対人関係の在り方、学習支援の在り方等、再登校の手立てをさらに検討していかなければならない。
- (2) 心的エネルギーの高まりや情緒的安定感を獲得できて適応指導教室に居場所を作ることができても、不登校が長期間に及ぶものは学校（学級）に居場所がないという認識を持っている。学校との連携を維持発展していかなければ再登校は難しい。
- (3) 適応指導教室の性質上、徐々に通所する児童生徒が多くなっていく。この通所生への効果を考えると、「活動性を向上させる自然体験」「社会性を培う職場体験・ボランティア体験」の二つの柱が年間を通じて交互に配置されるような形であれば、2学期以降に通所してくる児童生徒にも対応する効果的なプログラムとなるのではないかと考える。ここ2年間のプログラム配置例を次頁に示す。

- (4) 体験プログラム実施前後の通所生一人一人に応じた取り組みを十分に行う必要がある。つまり、プログラムの効果を十分に発揮させるには、成長・発達に応じた見立てと個々の通所生の実態にあった明確な指導の方針、指導員と通所生の信頼関係づくりを大切にしなければならない。そして心的エネルギーの高まりを背景として、方向付けの面談をすることが重要となってくる。

〈プログラム配置例〉

1 学期		2 学期		3 学期
体験的適応指導				
宿泊体験 <i>菜園活動</i> 自然体験	ボランティア体験 社会体験	サマーキャンプ <i>菜園活動</i> 自然体験	職場体験 ボランティア体験 文化祭 社会体験	ウィンター キャンプ 自然体験
継続的適応指導				

※ 斜体表示は、19・20年度に文部科学省「問題を抱える子ども等の自立支援事業」で設定している以外の行事(県費設定行事)である。

〈注〉

教育相談課 指導主事 菊地暁浩，島浦靖

〈引用文献〉

第13回ヒトと動物の関係学会 第29回世界獣医学会 平成19年度日本獣医師学会年次大会
 長野県動物愛護センター「学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーのプログラムと心理的効果」

〈参考文献〉

青森県総合学校教育センター 2007 「一スケーリング・サポート・ネットワーク整備事業（SSN）
 －調査研究実践報告書」